

いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係

岩 本 崇*

"Okusai typed Wooden coffin "and Social Relation in Kofun Period

IWAMOTO Takashi

キーワード：古墳時代、山陰、北近畿、棺内礫敷、組合式木棺、箱式石棺

はじめに

古墳時代の山陰には、「奥才型木棺」と呼称される特徴的な構造をもつ木棺埋葬がある。「奥才型木棺」は、①内法長が3m以上であること、②棺内底面に礫敷をもつこと、③棺内が2区画以上からなることの三つの特徴によって定義づけられ、これらを満たす木棺が複数確認された島根県松江市の奥才古墳群を標式として設定された(赤澤2002)。

ただし、「奥才型木棺」は山陰を中心に分布するのではなく、北部九州や北近畿、近畿中央部にも分散しつつ展開する(石崎1997、赤澤2002)。重要なのは、複数の分布集中域がみとめられ、とくに北近畿が偏在する傾向を示す点にある。筆者もこの点に着目して、「奥才型木棺」が交流や交易、流通に関与し(岩本2003)、それらが王権を介さない直接的かつ個別的なつながりを背景にして展開した可能性を論じたことがある(岩本2010)。

いっぽうで、先の定義にかかわる特徴のうち①棺長と③棺内区画を欠くと「奥才型木棺」

には該当しなくなるわけであるが、短小ながらも②棺内底面に礫敷をもつ木棺が奥才古墳群で多数確認されている点はみのがせない。木棺の長さの違いはあるものの、「奥才型木棺」と短小ながらも棺内礫敷をもつ組合式木棺(以下、礫敷木棺と略記)は構造的に共通点があり、無関係であるとは考えにくい。「奥才型木棺」を葬法として理解するためには、短小な礫敷木棺との相対的な関係を明らかにしておく必要がある。

こうしたことから、本稿では島根県松江市に所在する奥才古墳群を分析の中心にすえ、埋葬施設の構造的な特徴に着目して「奥才型木棺」が創出されるプロセスと背景を論じる。また、埋葬施設から奥才古墳群をとらえなおし、その集団構造を把握するとともに、器物の入手・副葬形態から古墳群造営集団の実態に迫る。そのうえで、「奥才型木棺」の特質をあらためて浮き彫りとし、「奥才型木棺」の展開からうかがわれる古墳時代の集団関係について考察を試みる。

* 島根大学法文学部社会文化学科

1. 「奥才型木棺」と奥才古墳群

(1) 奥才古墳群の埋葬施設とその変遷

具体的な分析に先立ち、奥才古墳群における埋葬施設の内容と変遷をおおまかに確認する(表1)。

奥才古墳群において造墓活動がはじまる古墳時代前期前半には、舟底状木棺を含む刳抜式木棺(56・62号墳)、幅広の組合式木棺(57号墳)、箱式石棺(56号墳)など多様なあり方がみとめられる(図1)。これらはいずれも第Ⅷ支群に限定され、その後の前期中葉以降にはほかの支群にも古墳の築造が展開し、箱式石棺(13・14・17・32号墳)にくわえて、組合式木棺が埋葬施設の主体をなす。時期が下るにつれて箱式石棺は減少するが、組合式木棺は古墳時代中期前半ごろまでの間に総数32基で継続的に採用される。そのうち礫敷木棺は10基の存在が見込まれ、そこに「奥才型木棺」の2基も含まれる。

冒頭で述べたように、奥才古墳群では「奥才型木棺」だけでなく組合式木棺に棺内礫敷を採用する例の多い点が注目されるが、棺内礫敷は木棺に限定されず、箱式石棺(13・14・17号墳)や土器棺(34号墳)でもみとめられる。奥才古墳群において棺内礫敷は集団の主体性と不可分な特徴といえよう。

なお、奥才古墳群の造墓活動は古墳時代前期から中期前半を中心に展開したものと判断できるが、中期末以降にも少数の古墳が築造される(1・64号墳)。このうち1号墳では礫敷あるいは石室とされる埋葬施設が確認されているが、埋葬施設を墳丘構築と同時に盛土をほどこしながら進める点で構造に大きな違いがあり、前期から中期前半の埋葬施設とは系譜を異にする葬法と考えてよい。

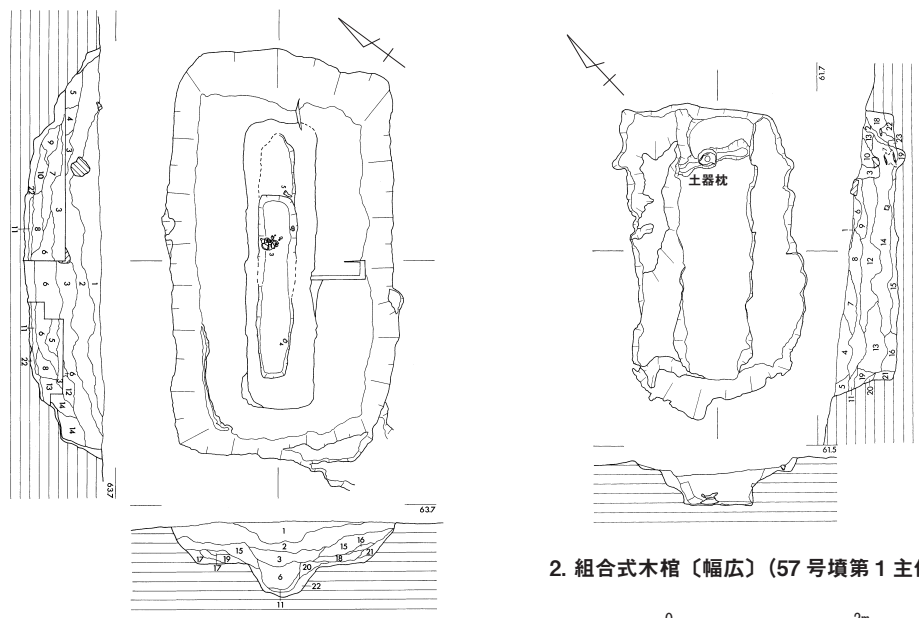
(2) 奥才古墳群における組合式木棺の分類

上述したとおり、奥才古墳群では組合式木棺が埋葬施設の主体をなし、そのなかに「奥才型木棺」が含まれる。したがって、「奥才型木棺」の古墳群における相対的位置を明らかにするには、組合式木棺を体系的に分類することが不可欠である。そこで以下では、木棺材の設置方法の違いを反映するとみられる墓壙底の様相差に着目して、奥才古墳群で確認された組合式木棺を分類する(図2)。ただし、幅広の組合式木棺については、ほかの大多数と系譜を異にするものと考え⁽¹⁾、以下でおこなう分類の対象に含めない。

組合式1類 棺底周囲に材を設置するための溝を掘削する例を組合式1類とする(図2-1・2)。その結果、墓壙底の棺に相当する範囲は棺台状に高くなる点が特徴となる。小口部の平面形態がH字形構造を指向するものが顕著であり、小規模にとどまる傾向を示し、箱式石棺との共通点を指摘できる。箱式石棺との折衷形式とみられる短辺のみ石材とする組合式木棺が39号墳第1主体部で確認されており、構造的に共通する点からも箱式石棺との高い関連性がうかがわれる(e.g. 石崎1997:135)。

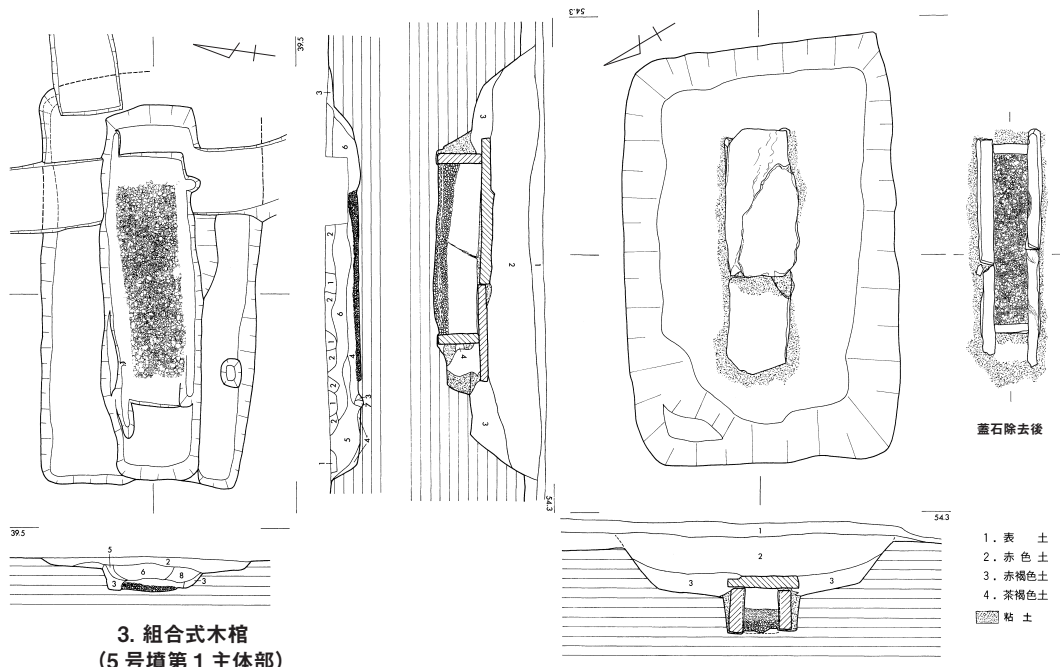
なお、奥才古墳群では箱式石棺に底板が確認された例は皆無であり、1類木棺が箱式石棺と共通点が多い点を考慮すれば、1類木棺にも底板がともなわない可能性が高い。礫敷をもつ1類木棺では、箱式石棺と同様に礫敷下部に堆積層がみとめられないことも、棺底板の不在を傍証する。箱式石棺の状況から、礫敷は底板を代替するものとみて差し支えないと考える。

さらに、1類木棺には棺下部構造の違いから、細分が可能である。棺下部を含めた墓壙底を全体に断面箱形に近く掘削するものを



1. 刳抜式木棺 (56号墳第1主体部)

2. 組合式木棺 (幅広) (57号墳第1主体部)



3. 組合式木棺 (5号墳第1主体部)

4. 箱式石棺 (14号墳第1主体部)

図1 奥才古墳群の埋葬施設

1a類とする (図2-1)。1a類で礫敷を備える例は、いずれも礫が薄く簡素である。これにたいし、墓壇底の棺下部に断面U字形の掘り込みを掘削するものを1b類とする (図

2-2)。1b類では重厚な礫敷が確認される。1b類は1基しか確認されておらず、例外的な構造をもつものとみられ、1類木棺の主体をなすのは1a類である。

表 1 奥才古墳群の

支群	名称	墳丘		埋葬施設							
		形態	規模 (m)	種別	礎敷	長大タイプ	棺内区画	小口構造	木棺形式	規模 (m)	
第III支群	1号墳	円?	10	礎敷?						3.15	
	4号墳	方	11×8	墓壇のみ	?					2.2以下	
	5号墳	方	16×16	①組合式木棺 (礎敷) ②墓壇のみ	○ ?			H字形 H字形	組合1a類 組合1a類	2.1 —	
	6号墳	方	13×11	組合式木棺					組合1a類	1.5	
	7号墳	方	12×10	①組合式木棺 (礎敷)	○				組合1a類	1.7	
	8号墳	方	12×10	礎敷?	○?					—	
	10号墳	方	14×9	①組合式木棺? ②組合式木棺? ③組合式木棺	? ? ?				組合2類? 組合2類? 組合2類	1.8以下 2.0以下 2.1	
第IV支群	11号墳	方	16×15	組合式木棺 (礎敷・3区画)	○	○	○		組合2類	4.4	
	29号墳	方	12×10	①組合式木棺 (礎敷) ②組合式木棺?	○ ?			H字形	組合1a類	1.8 2.2以下	
	30号墳	方	8×8	組合式木棺 (礎敷)?	○					1.8	
	12号墳	方	21×18	①組合式木棺 (礎敷)	○	○		H字形	組合1b類	3.2	
				②組合式木棺					組合1a類	1.8以上	
				③組合式木棺					組合1a類	1.5以上	
31号墳	方	12×10	④土器棺 (壺2点)?						0.8程度		
39号墳	方	8	組合式木棺						1.7		
第V支群	13号墳	方	23×19	①箱式石棺 (礎敷)	○					組合1a類	2.4?
				②組合式木棺							1.6
				①箱式石棺 (礎敷)	○						1.6
				②箱式石棺 (礎敷)	○			H字形		1.9	
	③土器棺 (壺1点)							0.8程度			
	④? 土器棺 (甕2点)							0.6程度			
	14号墳	円	18	①箱式石棺 (礎敷) ②箱式石棺 (礎敷)	○ ○			H字形 H字形		1.8 1.8	
33号墳	方	14×6	組合式木棺 (礎敷・3区画)	○	○	○		組合2類	4.3		
34号墳	方	11×8	土器棺 (壺2点)	○					0.3~0.4程度		
35号墳	方	10×8	組合式木棺		○			組合1a類	3.6		
16号墳	方	20×15	①不明 (削平)	?						—	
			②組合式木棺?	?				組合1a類	2.2		
第VI支群	17号墳	円	20	①箱式石棺 (礎敷)	○			H字形		1.6	
				②組合式木棺 (礎敷)	○				組合1a類	1.9	
				③組合式木棺?	?					1.7	
18号墳	円	10以下	組合式木棺?	?					1.6		
第VII支群	32号墳	方	9.5	箱式石棺				H字形		1.1	
第VIII支群	55号墳	方	8×10	組合式木棺					組合2類	不明	
	56号墳	方	14×10	①刳拔式木棺				△	刳拔	2.6	
				②箱式石棺						0.58	
	68号墳 番外1号	方	2×7 なし	石蓋土壇						1.5	
				石蓋土壇						1.8	
	57号墳	方	10×8	①組合式木棺					組合2類	2.5	
				②土器被覆土壇 (壺か甕1点)						0.8	
	58号墳	方	7×7	①木棺						1.6	
				②木棺						1.6	
	59号墳	方	7×7	組合式木棺					組合2類	2.8	
	60号墳	方	7×8	組合式木棺					組合2類	2.5	
	61号墳	方	9×8	①組合式木棺 (礎敷)	○		○		組合2類	2.4	
				②組合式木棺					組合2類	2.1	
				③土器棺 (甕2点)						0.8	
65号墳	方	5×5	組合式木棺						1.7		
67号墳	方	3×3	土器棺 (壺1点)						0.6		
62号墳	方	16×14	①刳拔式木棺						刳拔	3.5?	
			①土器棺 (甕1点)							0.4	
			②土壇							0.6	
			③組合式木棺							1.3	
			④組合式木棺							1.4	
			⑤組合式木棺							1.8	
⑥組合式木棺								1.3			

〔凡例〕墳丘形態は、方：方墳、円：円墳。埋葬施設の規模は内法長（棺構造のわかる例は棺の内法長）。棺長3m以上を長大タイプとする。古墳時期は岩本2015・2018などに依拠し、I期：前期前半古相、II期：前期前半新相、III期：前期中葉、IV期：前期後半古相、V期：前期後半新相、VI期：中期初頭、VII期：中期前半、VIII期（TK73）：中期中葉、IX期（TK216）：中期後半古相、X期（TK208）：中期後半新相、

岩 本 崇

埋葬施設一覧

埋葬施設 主軸	副葬品	古墳時期	備考
E-21°-S	碧玉管玉 3、水晶切子玉 1、刀 1、刀子 1、須恵器蓋杯 3 組	後期前半	須恵器出雲 2 期 (=陶邑 MT15 ~ TK10 型式)
E-23°-N	—		
E-7°-N	刀子 1		棺設置方法は箱式石棺に近い
E-23°-N	—		
E-7°-S	鉄片		棺設置方法は箱式石棺に近い
E-15°-N	—		石枕
—	—		
E-5°-N?	—		棺底部分のみ残存か (墓壇底の棺下部の凹部か)
E-7°-N?	鉄器片 1		棺底部分のみ残存か (墓壇底の棺下部の凹部か)
E-13°-N	—		墓壇底の棺下部に凹部
E-14°-N	刀子片 2、鉄鏃片 1		石枕
E-16°-W	滑石勾玉 1	前期後半～	棺設置方法は箱式石棺に近い
E-11°-W	—		棺底部分のみ残存か
E-1°-N	—		石枕
E-38°-N	鉄鏃 1、刀子片 1	前期後半～	礫厚い、下部構造的、棺設置方法は箱式石棺に近い
S-30°-E	—		墓壇底の棺下部に凹部
S-44°-E	鏡 1、碧玉管玉 3	前期後半新相～	棺設置方法は箱式石棺に近い
—	—	中期初頭	大角山式古
E-44°-N	—		墓壇底の棺下部に凹部
E-44°-S	—		木棺・石棺折衷構造
E-16°-S	—		棺底部分のみ残存か (墓壇底の棺下部の凹部か)
E-27°-S	—		土器棺は小谷 3 式古
E-30°-S	—		土器棺は小谷 3 式古
—	—	前期中葉	小谷 3 式古
—	—	前期後半古相	小谷 3 式新
E-30°-S	鏡 2、素環刀 1、剣 1、ヤリ 1、鉄鏃 1、鉈 2、刀子 2	前期後半古相	鉈の 1 点を折曲副葬
E-34°-S	剣 1、鉄鏃 1、刀子 1、鉄針 1	前期後半古相	墓壇底を棺台状、刀子を折曲副葬
N-28°-E	—		
—	鏡 1、石釧 1、碧玉勾玉 1、琥珀勾玉 1、鉄針	前期後半新相	小谷 4 式
N-42°-E	—		棺設置方法は箱式石棺に近い
—	—		
E-41°-N	—		棺設置方法は箱式石棺に近い
E-29°-S	刀子 1、棒状鉄製品 1		石枕、墓壇底を棺台状
E-11°-N	—		埋葬施設上に標石、棺設置方法は箱式石棺に近い
E-22°-S	—		棺底部分のみ残存か (墓壇底の棺下部の凹部か)
W-17°-S	滑石白玉 36	中期初頭～前半	棺底部分のみ残存か (墓壇底の棺下部の凹部か)
E-14°-N	剣 1		墓壇底を棺台状
N-40°-E	滑石勾玉 1、ガラス管玉 1	前期後半～	支群最高所、遺存状態悪い
E-35°-N	鉄鏃 1、刀子片 1	前期前半	仕切板は不確実、鎌は折曲副葬、草田 6 ~ 小谷 2 式
N-33°-E	—		小型 (小児用か)
E-45°-S	有袋鉄斧 1		
N-19°-E	—		68 号墳に従属する埋葬か
N-43°-E	土師器鼓形器台 1 (土器枕)	前期前半新相	小谷 2 式、木棺は幅が広め
W-33°-N	—	前期前半新相	小谷 2 式
W-32.5°-N	刀子片 1		第 2 主体を切る
W-34°-N	—		幅狭い
S-39°-W	—	前期後半古相	埋葬施設上の鼓形器台・高坏から小谷 3 新
W-44°-N	—		
S-31°-E	刀子 1		
S-31°-E	—		
E-42°-S	—	前期後半	布留形甕
E-30°-N	刀子 1		
E-16°-N	—	前期	非在地系土器
W-35°-S	鉈 1	前期前半か	舟底状木棺
S-39°-E	—	中期前半	大角山式
N-31°-W	—		遺存状態悪い
N-10°-E	—		遺存状態悪い
S-14°-E	—		遺存状態悪い
E-14°-N	—		遺存状態悪い
W-12°-N	—		遺存状態悪い

XI 期 (TK23・47) : 中期末、XII 期 (MT15・TK10) : 後期前半、XIII 期 (TK43) : 後期後半、XIV 期 (TK209) : 後期末と便宜的に表現する。古式土師器の編年は松山 2015・2018、須恵器編年は田辺 1981 ならびに大谷 1994 に依拠する。

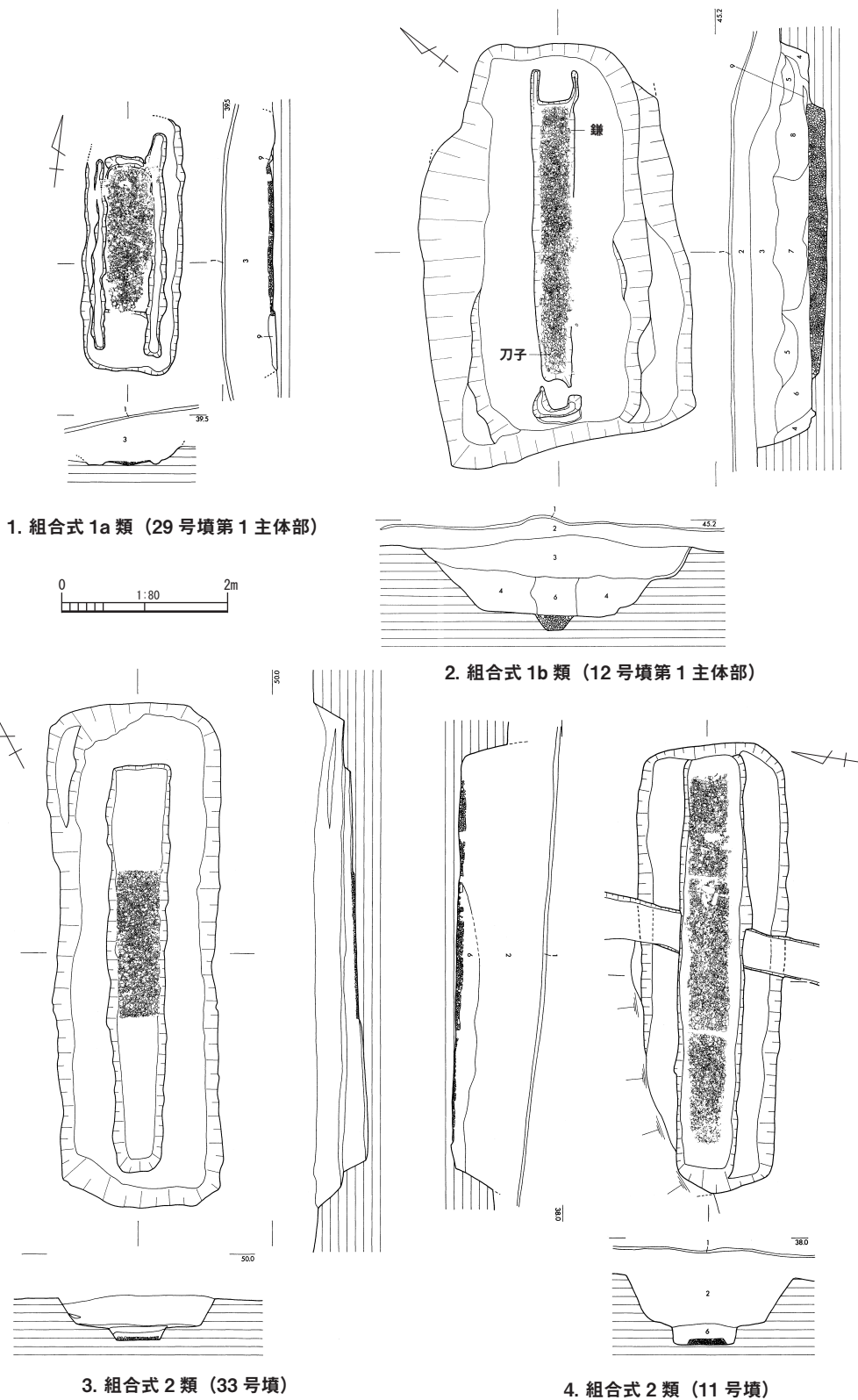


図 2 奥才古墳群における組合式木棺の分類

組合式2類 棺底周囲に材を設置するための溝をもたず、墓壇底面が平坦な例を組合式2類とする(図2-3・4)。小口部平面形は明瞭なH字形を指向しない。相対的に棺の長いものは2類に含まれる傾向を示す。礎敷をもつものは、いずれも薄く簡素である。なお、「奥才型木棺」は2類に含まれる。

ちなみに、2類木棺についても、1類と同様に、礎敷下部に堆積がみとめられないことから、棺底板をとみなわない構造であった可能性が高い⁽²⁾。つまり、棺底板の不在は箱式石棺との構造的な共通性によるものと理解できる。

変遷 木棺構造の点から上記の類型の前後関係として、墓壇底への掘削をとみなう1類から、構造的にはより簡略化した2類への推移を想定できる。この想定は、1・2類が底板のない棺構造であり、ともに箱式石棺との共通性を有する点とも矛盾しない。すなわち、1類が細部構造や規模においてもより箱式石棺に近似し、2類は1類よりも箱式石棺との類似性が弱まるという、一連の型式変化を示すと考える。

それでは、上記の想定を遺構の年代から検証してみよう。出土遺物から時期の明らかな1類木棺には、前期後半の29号墳第1主体部(礎敷)、前期後半新相の12号墳第3主体部、前期後半から中期前半とみられる12号墳第1主体部(礎敷)がある。したがって、1類木棺が前期後半に出現していたことは確実である。さらに、2類木棺で時期の明らかな例は、前期後半古相の59号墳、前期後半以降とみられる55号墳である。つまり、2類木棺も1類と同様に、前期後半には出現していたことがわかる。このように、遺構の年代からは1類木棺から2類木棺への推移はきわめて短期間に進行した可能性、中期前半ご

ろまでは両者が併存した可能性を想定しておく必要がある。

なお、構造と規模の両面において1類木棺が箱式石棺と酷似する点を同時期性によるものと理解してよければ、1類木棺と構造と規模が共通した箱式石棺が前期中葉の13号墳第1・2主体部に採用されており、1類木棺の上限年代を間接的に示すことになる。また、13号墳第1・2主体部の箱式石棺は礎敷を有する奥才古墳群の埋葬施設のなかでもっとも古く位置づけられることから、礎敷をもつ埋葬施設は前期前半に遡らない。つまり、礎敷の採用は、13号墳を嚆矢として、その築造年代とみられる前期中葉以降にはじまったとみなしうる。その点では、前期中葉を奥才古墳群における埋葬施設の変遷の画期と評価することも可能である。

2. 埋葬施設からみた奥才古墳群

つぎに、埋葬施設の形式や構造の異同をふまえて奥才古墳群の集団構造について検討をおこなう。

本稿で対象とする奥才古墳群は、小型の墳丘をもち、かつそれらが群集する点にも特色がある。小規模墳の群集といえば、いわゆる「群集墳」が想起されるが、この用語は時期的な概念や歴史的な評価を含み、古墳時代の集団構造にみる社会的・政治的な画期を評価するために用いられてきた経緯がある(石部1975、近藤1983、和田1992)。しかし、現象面においては、奥才古墳群における小規模墳の群集は、「群集墳」と共通するところが多く、これと対比されるのは地域集団の代表者としての性格をおびる「首長墳」である。それでは、奥才古墳群の被葬者集団はどのような性格をもち、それぞれにどのような関係

にあったのか、さらには地域社会においていかなる存在であったのであろうか。

この問題を考える前提を確認するにあたり、一墳頂複数埋葬ならびに一墳頂単数埋葬の具体例の様相を把握しつつ⁽³⁾、古墳築造から析出可能な集団の基礎単位を抽出してみよう。さらに、集団の基礎単位どうしの関係を分析し、基礎単位の性格に迫る。あわせて、以上の分析をふまえつつ、「奥才型木棺」の古墳群における相対的な位置についても確認することとしたい。

(1) 埋葬形態と集団の基礎単位

一墳頂複数埋葬 奥才古墳群において、同じ古墳の墳頂に複数の埋葬施設が確認された例は14基を数える。これらには埋葬施設のなかでも棺そのものの特徴に、規模や構造に差があるものと、差がなく等質的なものの二者がみられる。前者を複数格差型埋葬、後者を複数同格型埋葬と呼称⁽⁴⁾する(e.g. 岩永2010)。

複数格差型埋葬には、12号墳のように、礫敷の有無によって木棺の規模と墳頂での位置が異なり、礫敷木棺の規模がより大きく、かつ墳頂のより中央に位置する状況がみとめられる(図3-1)。被葬者の社会的位置は、礫敷木棺が礫敷のない木棺よりも優位であったことが推測される。あるいは、56号墳のように、①刳拔式木棺と②小型箱式石棺が併存し、①の規模が大きくかつ墳頂の中央に位置する状況も確認される(図3-2)。この事例からは、埋葬施設に形式差ではなく、規模と墳頂での位置関係によって被葬者の優劣が決定された可能性の高いことがうかがわれる。これらの埋葬施設に優劣をみいだしうるケースでは、長大な棺やそれに準ずる例が含まれる傾向にある。

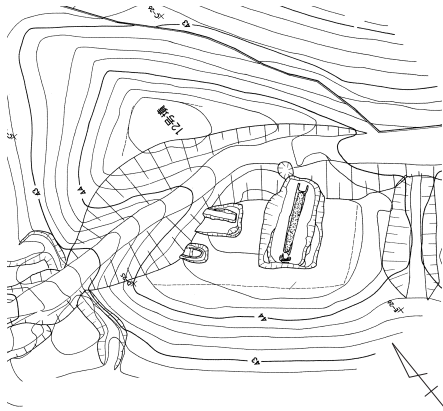
いっぽう、複数同格型埋葬では、墳頂に同形式・同規模の棺が墳頂に並列する点が特徴的である。具体例として13号墳と14号墳では、それぞれ2基の礫敷をもつ箱式石棺が構築され、いずれも棺長は同程度の規模であり⁽⁵⁾、かつ並列して墳頂に位置する(図3-3)。5号墳でも同程度の規模の1類木棺がやはり墳頂に並列する。これら複数同格型埋葬では、並列する埋葬施設が長大なものではなく卓越しない点が注目される。

一墳頂単数埋葬 奥才古墳群では1基の古墳の墳頂において埋葬施設が1基のみとなる例が少なからず確認されている。これを単数型埋葬と表記する(e.g. 岩永2010)。

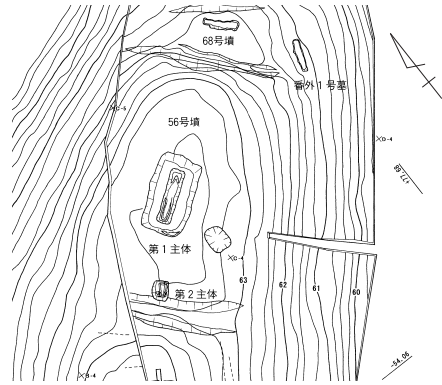
単数型埋葬は、7・11・33・34・35号墳で確認され、それらの埋葬施設は墳頂部の中央に位置することを基本とする(図3-4・5)。とすれば、これらの古墳では計画的に1基の埋葬施設が墳頂に構築された可能性が高い。さらに、上記の5基の古墳の埋葬施設は、35号墳を除いてすべてが棺内礫敷を備えており、古墳群で2例確認されている「奥才型木棺」が含まれる(11・33号墳)。

集団の基礎単位と古墳群 ここまでの分析で明らかとなったように、奥才古墳群では埋葬施設の類型と一墳頂における埋葬施設数と格差の有無にいくつかのパターンがみとめられる。そこで、そのパターンの違いから被葬者を輩出する集団の基礎単位を抽出し、基礎単位の性格を探るために、支群での状況を確認することとしたい。

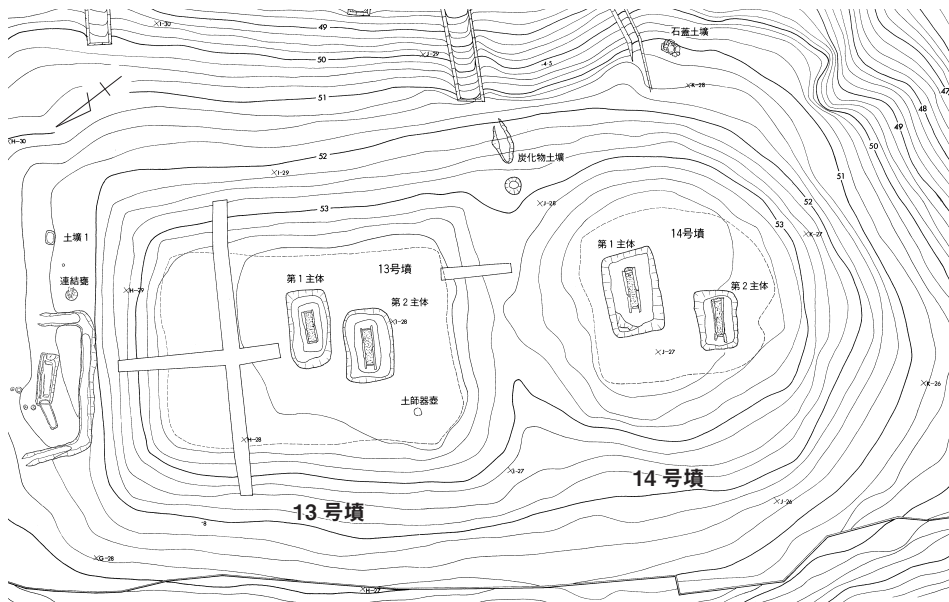
奥才古墳群の各支群のなかでも、埋葬施設の内容と時期が比較的良好に把握できるのは第V支群である。第V支群の様相は大きく二大別して把握するのが妥当と考える。すなわち、13・14号墳にみる複数同格型埋葬と、33・34・35号墳にみる単数型埋葬である(図



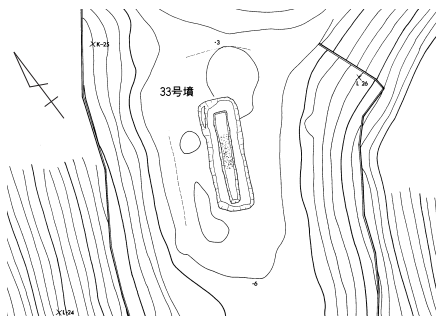
1. 複数格差型埋葬 (12号墳)



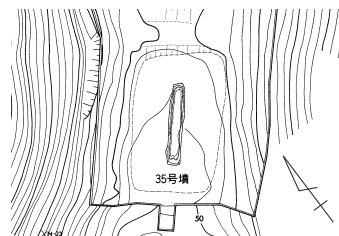
2. 複数格差型埋葬 (56号墳)



3. 複数同格型埋葬 (13・14号墳)



4. 単数型埋葬 (33号墳)



5. 単数型埋葬 (35号墳)

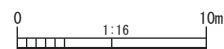


図3 一墳頂複数埋葬と一墳頂単数埋葬

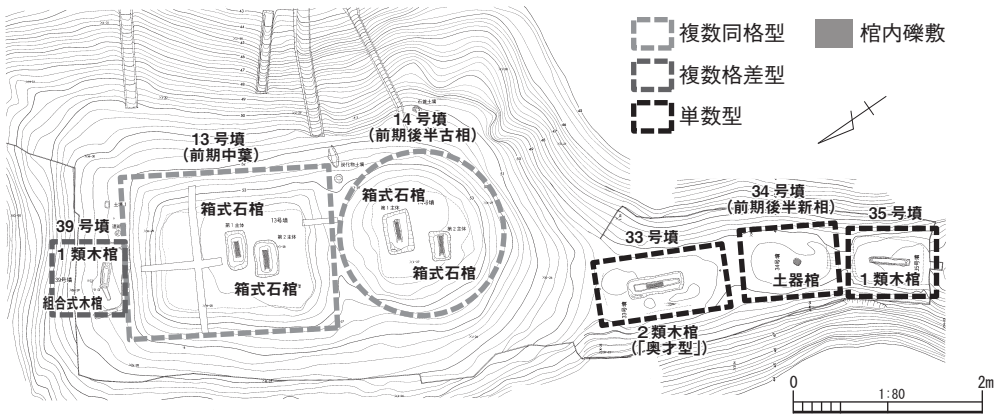


図4 奥才古墳群第V支群にみる造墓の基礎単位

4)。これらは埋葬施設の軸も方向を違えるなど、支群において一定の共通性を示す古墳が2、3基ずつ程度で近接して存在する様相を呈しており、この2、3基ずつの古墳からなる単位が被葬者を輩出する集団の基礎単位となっていることがわかる。

そのうえで、複数同格型埋葬と単数型埋葬の墳丘規模を比較すると、前者の13・14号墳が明らかに、後者の33・34・35号墳を凌駕しており、前者が支群内でより優位であったことが明らかである。箱式石棺が組合式木棺より上位に位置づけられるとの理解は、第VI支群で墳丘規模の大きな17号墳において、礫敷箱式石棺が礫敷木棺（1a類）より墳頂中央に位置することとも整合的であり、埋葬施設の形式差は古墳群に通底する序列を反映したものとみられる。

さらに、築造年代については、出土遺物から13号墳を古墳時代前期中葉、14号墳を前期後半古相と前後に比定しうるが、13号墳と14号墳の箱式石棺の蓋石は同一の母岩からなるものとみられる（赤沢・三宅・広江ほか1985）。つまり、13・14号墳の埋葬は短期間のうちにおこなわれたと判断でき、古墳間で石材を共有する状況から、基礎単位はき

わめて強い関係性をもつ集団と推定できる。いっぽうで、同一支群の隣接する基礎単位間で埋葬施設形式やその軸方向、一墳頂の埋葬数などが相違（13・14号墳／33・34・35号墳）することを考えると、基礎単位は同時期の有力な「単位集団」（近藤1959・1983）あるいは有力な「世帯共同体」（都出1979・1984）から輩出された可能性が高く、ほぼ同じ世代におさまる血縁関係を反映したものとみられる。

また、第V支群から離れるにつれて、こうした基礎単位が明瞭でなくなる状況がみられる点は、相対的に第V支群を中心として他支群がこれに従属する構造であったことをうかがわせる。古墳群において共通する埋葬施設構造があり、それにもとづいて基礎単位間に階層差が生じる状況から、古墳群の造営主体はおおまかにみて一つの出自集団ととらえる。奥才古墳群の周辺には名分丸山1号墳（前方後方墳・約39m）や鶴灘山6号墳（前方後円墳・約40m）など、当地の首長墳と想定される古墳が同時期に系列的に築造されていることから、奥才古墳群にはそれとは別の出自集団を想定しておくのが妥当であろう。さらに、奥才古墳群では小児用とみられ

る土器棺墓が一定数確認され、そのなかには礫敷を備え、かつ副葬品を保有する例があることから、より上位に位置づけうる例（34号墳）が基礎単位内に埋め込まれている。

上記の諸点を総合的に評価すると、奥才古墳群の造営主体はいわゆる「クラン」にほぼ相当し（e.g. サーヴィス 1979）、階層化がかなりの程度まで進行した結果として有力サブクランあるいは有力リネージに相当する基礎単位が顕在化した状況にあるといえよう（e.g. 田中 2000、岩永 2010）。

（2）古墳群における「奥才型木棺」の位置

前節での分析をふまえて、古墳群における「奥才型木棺」の相対的な位置づけを確認しておきたい。

冒頭に示した定義にあてはまる「奥才型木棺」は、11号墳と33号墳で確認されている。いずれも前節の単数型埋葬に該当し、一墳頂において1基のみ埋葬施設が構築される古墳に限定され、一墳頂複数埋葬例は古墳群内で確認されていない。「奥才型木棺」の特徴となる3要素のうち、②「棺内礫敷」と③「棺内区画」をもつが、①「棺長3m以上」に満たない例として、61号墳第1主体部がある。61号墳の複数埋葬のなかで第1主体部は規模がもっとも長く、墳頂中央に位置することから、同じ古墳被葬者集団のなかでは上位にあることがわかる。すでに述べたように、奥才古墳群においては棺内礫敷が上位層に偏る傾向がある点をふまえると、棺内礫敷をもつ組合式木棺のなかでも長大な例となる「奥才型木棺」は、卓越した存在であったと評価できる。つまり、「奥才型木棺」の出現は、組合式木棺の長大化の一つの到達点と評価することが可能なのである。

なお、「奥才型木棺」が古墳群で採用され

た時期については、出土遺物から古墳時代前期後半から中期前半に比定され、前期中葉から前期後半とみられる礫敷箱式石棺よりも相対的に後出する傾向を示す。とすれば、奥才古墳群の最上位層の埋葬施設は、礫敷箱式石棺から「奥才型木棺」へと重なりをもちつつ推移していった可能性が考えられよう。

3. 器物の入手・副葬と奥才古墳群

つぎに奥才古墳群の造営主体の社会的位置を確認するために、器物の入手・副葬実態を検討することにした。

鏡の入手と完形鏡副葬 奥才古墳群では14号墳第1主体部から中型鏡（倭鏡・径17.9cm）1面と小型鏡（魏晋鏡・径11.0cm）1面、34号墳から超小型鏡（倭鏡・径7.8cm）1面、12号墳第3主体部から超小型鏡（倭鏡・径6.8cm）1面が出土している（図5）。12号墳の鏡は欠損しているものの破鏡とみられ、ほかは完形鏡である。

倭鏡のうち14号墳例と34号墳例は、近畿中央部で一元的に製作された可能性がきわめて高く、完形鏡で副葬している点からも倭王権との関係のもと入手されたと考えられる（e.g. 下垣 2003）。同様に、14号墳の小型鏡は魏晋鏡ながらも、日本列島にしか分布しない型式であることなどから、倭王権向けの「特鑄品」あるいは倭王権による中国への「受注品」である可能性が高い鏡である（岩本 2019・2020）。その分配主体は倭王権と想定されるので、完形の倭鏡と同じく、倭王権とのかかわりのなかで入手しえたものと考えたい。14号墳の紡錘車形石製品や34号墳の石釧なども含めて、いわゆる首長墳に目立って副葬されるこれらの器物がまとまって存在することは、その入手にあたって倭王権



1. 内行花文鏡系 17.9cm
(14号墳)



2. 方格丁字文鏡 11.0cm
(14号墳)



3. 振文鏡系 7.8cm
(34号墳)

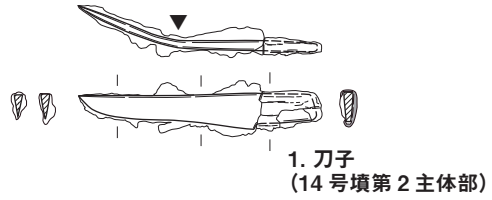


4. 珠文鏡系 6.8cm
(12号墳)

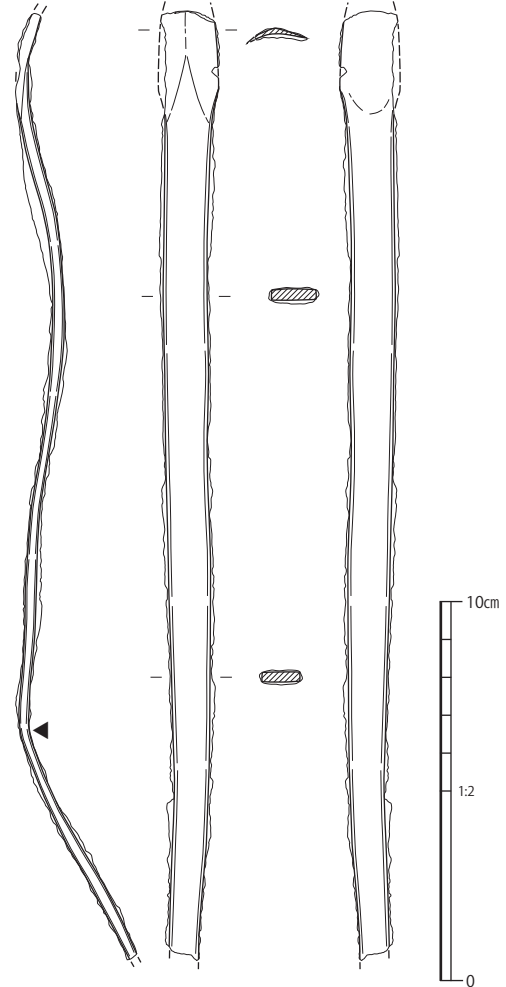
図5 奥才古墳群出土の鏡 (S=1:3)

との直接的な関係を想定しうる。

なお、14号墳の中型鏡は径17.9cmであるが、同時期における同等サイズの鏡を島根県東部地域であげると、造山1号墳第1主体部例（魏晋鏡・17.1cm）、上野1号墳（倭鏡・17.4cm）があてはまる程度である。造山1号墳が一辺約60mの方墳、上野1号墳が径39mの円墳であることをふまえると、奥才



1. 刀子
(14号墳第2主体部)



2. 鉞
(14号墳第1主体部)

▼: 折り曲げ箇所

図6 奥才古墳群出土の折り曲げ鉄器

14号墳の鏡は島根県東部地域を代表する首長層に匹敵するものといえる。このことは古墳群において鏡の副葬例が埋葬施設においてほかより卓越するわけではない点とも整合的であり、倭王権といった外部権力による「外的承認」（小林1955）の結果が、集団内の

古墳築造には未反映な状態をとどめているとみることもできよう。ともあれ、奥才古墳群の鏡をはじめとする副葬品が首長墳のそれと匹敵する内容であることは、古墳群内に首長としての性格に類した被葬者が存在した可能性を示すものといえるだろう⁽⁶⁾。

折り曲げ鉄器副葬と地域間交流 鏡の完形鏡副葬にたいし、対照的であるのが鉄器の折り曲げ副葬である。奥才古墳群では14号墳第1主体部で鉈、14号墳第2主体部で刀子と56号墳第1主体部で鎌の折り曲げ副葬が確認されている(図6)。

鉄器の折り曲げ副葬は、古墳時代前期においては山陰から北近畿にかけて類例が目立ち(田中2006・2017、磯貝2019)、刀子・鉈・鎌が折り曲げの対象となることも共通する。いっぽうで、折り曲げ副葬は、近畿中央部ではごくわずかであることから、山陰から北近畿を中心とした地域間交流を背景とした地域的な対応の結果によるものと評価できよう(e.g. 清家2002ほか⁽⁷⁾)

ところで、12号墳の倭鏡については、古墳時代以降に比定しうる資料であるが、破鏡となっている点から、破鏡が卓越する北部九州とのかかわりで入手した可能性も想定しておきたい。埋葬施設との対応関係から、破鏡が完形鏡よりも劣位に格づけられていたとみられる点も示唆的である。鉄器の折り曲げ副葬と同様に、倭王権を介さない地域間交流を奥才古墳群の築造背景として考慮しておく必要があろう。

器物の入手・副葬と交流の重層性 以上の分析結果をふまえると、奥才14号墳第1主体部では倭鏡と魏晋鏡からなる2面の完形鏡副葬と、鉄器の折り曲げ副葬が同時におこなわれている点があたためて注目される。鏡の入手副葬にみえる倭王権を中心とした広域性

と、折り曲げ鉄器副葬にみえる北近畿・山陰の主体性が重層していたことが确实視されるのである。先に、奥才14号墳の鏡を島根県東部地域の有力首長層に匹敵する内容であると評価したが⁽⁸⁾、古墳群の造営主体の背後に想定される交流の質的内容からも奥才古墳群を「首長墳」に対比される小規模墳としてのみとらえることは不適切なのである。そこには、首長としての性格に類した被葬者の存在と、「首長墳」を築造するような集団とは異なる主体性の存在を想定しておく必要があると考える。

4. いわゆる「奥才型木棺」 と古墳時代の集団関係

本章ではここまでの分析をふまえつつ、「奥才型木棺」の他地域における受容状況を検討し、「奥才型木棺」をめぐる古墳時代の集団関係がいかなるものであったのかを考察することとしたい。

「奥才型木棺」の広がり 図7にみるように「奥才型木棺」は、北近畿(但馬・丹後・丹波)、山陰(出雲)、北部九州(筑前)にくわえて近畿中央部(山城・摂津・河内)に分布する。近畿中央部から北近畿では内陸に分布し、北近畿でも丹後以西の日本海側では集中域が点在する状況を示す。内陸分布と沿岸部分布の様相が転換する北近畿に集中的な分布がみとめられることから、北近畿を交流の結節点として日本海を介した交流と近畿中央部へのルートが接続される状況が明瞭にうかがわれる。奥才14号墳で完形鏡副葬と鉄器の折り曲げ副葬から想定した交流の重層性は、「奥才型木棺」の分布状況からも裏づけられるのである。

「奥才型木棺」と首長墳 「奥才型木棺」は

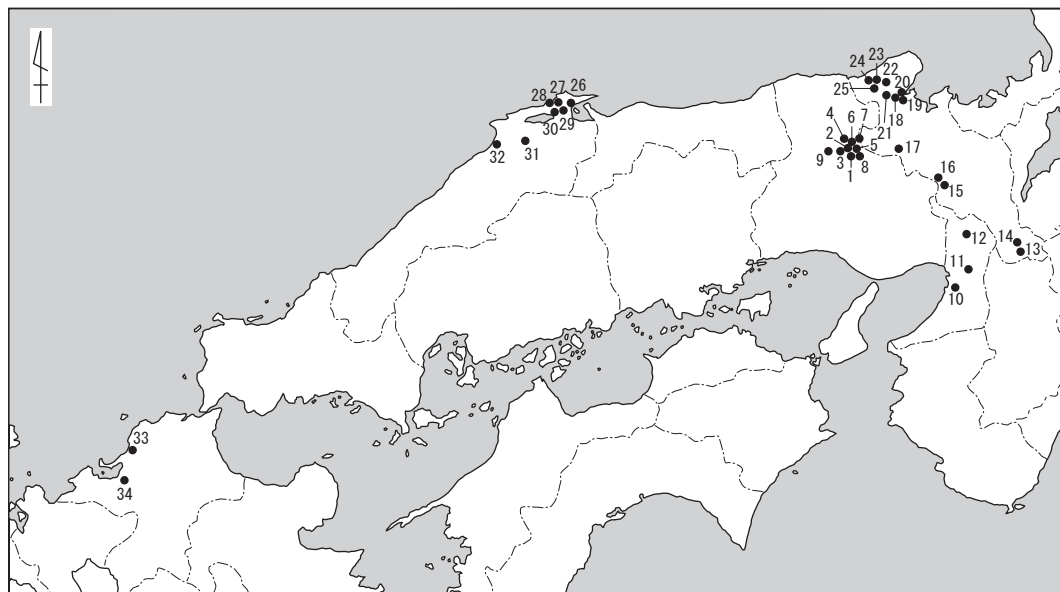


図7 「奥才型木棺」の分布

1. 茶すり山古墳第1主体部 2. 茶すり山古墳第2主体部 3. 筒江中山23号墳 4. 大月北山2号墳 5. 芝花11号墳
 6. 芝花10号墳 SX1001 7. 芝花10号墳 SX1002 8. 馬場17号墳 9. 田和1号墳 10. 湯の山古墳 11. 心合寺山古墳
 12. 弁天山 D3号墳 13. 西山塚古墳 14. 内田山 B2号墳 15. 岸ヶ前2号墳 16. 町田東3号墳 17. スクモ2号墳
 18. 日ノ内古墳第1主体部 19. 日ノ内古墳第2主体部 20. 日ノ内古墳第3主体部 21. 左坂 C21号墳 22. 奈良岡北1号墳
 23. 溝谷3号墳 24. 溝谷2号墳 25. 大田南6号墳 26. 春日山4号墳 27. 奥才33号墳 28. 奥才11号墳 29. 金崎6号墳
 30. 月廻7号墳第2主体部 31. 斐伊中山2号墳第Ⅲ主体部 32. 間谷東古墳 33. 千鳥21号墳 34. 萱葉1号墳

有力首長墳と確認視できる例でも採用されている。兵庫県茶すり山古墳（円墳・径90m）では長さ8.7mの「奥才型木棺」が粘土櫛に格納され、大阪府心合寺山古墳（前方後円墳・墳長157m）では長さ7.3mの粘土櫛に「奥才型木棺」がおさまられていた。前者は南但馬、後者は中河内を代表する古墳時代中期の首長墳である。これらの例では、棺の長さが5mを超えるなど、長大化が著しい点の特筆される。

同様に、棺長5m超となる例は北近畿に目立つ。兵庫県茶すり山古墳（棺長8.7m）、兵庫県筒江中山23号墳（棺長7.3m）、兵庫県馬場17号墳（棺長5.0m）、京都府溝谷2号墳（棺長7.7m）、京都府日ノ内古墳第1主体部（棺長7.5m）、京都府大田南6号墳（棺長5.4m）、京都府左坂C21号墳（棺長5.3m）

が確認できる範囲では知られる。北近畿では「奥才型木棺」は17例が確認されているため、4割以上が5m超の木棺を採用していることになる。山陰以西では棺長5m超となる例はなく、北近畿に偏在する状況から、北近畿では首長墳において「奥才型木棺」が副葬される傾向が強いことを指摘できよう。上述の棺長5m超となる古墳では鏡をはじめとした豊富な副葬品を保有する例が多いことも整合的であるといえるだろう。

「奥才型木棺」の出現年代 北近畿では「奥才型木棺」を積極的に首長墓に採用することが明らかとなったが、分布の中心でもある北近畿を起源とするものなのであろうか。この点を考えるためにも、「奥才型木棺」の出現年代を検討しておきたい。

北近畿の「奥才型木棺」でもっとも古相を

示すのは、兵庫県芝花11号墳である。第1主体部が「奥才型木棺」で、第3主体部が土器棺である。土器棺に使用された甕が布留2式、壺が小谷4式とみられ、前期後半新相に位置づけられよう。第3主体部は第1主体部を切って構築されていることから（岸本編2008）、第1主体部の「奥才型木棺」の下限年代が前期後半新相となる。この年代観は第1章で検討した奥才古墳群における2類木棺の出現が前期後半のなかで出現したとする変遷観とも矛盾しない。

いっぽう、近畿中央部の「奥才型木棺」は基本的に時期が遅れる傾向にあり、古墳時代中期に属するものが主体である。したがって、「奥才型木棺」は時期的に古いものを含む山陰か北近畿において創出されたものとみてよいだろう。そうした状況にあって、奥才古墳群において特筆すべきは、「奥才型木棺」を含む2類木棺に型式学的に先行する1類木棺を設定しうる点にある。この状況にたいし、そもそも北近畿では、「奥才型木棺」以外の礫敷木棺はわずかし確認例がなく（赤澤2002）、礫敷箱式石棺から「奥才型木棺」への展開を中継する1類木棺がいまのところ確認されていない⁽⁹⁾。この点において、「奥才型木棺」の出現をもっともスムーズに追えるのは、現状の資料のなかでは奥才古墳群に限定されており、「奥才型木棺」は奥才古墳群あるいはその周辺における主体性を示すものである可能性はきわめて高いといえよう。

以上に検討したように、「奥才型木棺」の出現は奥才古墳群と芝花11号墳でほぼ同時期としておくのが妥当であり、それは前期後半新相である。この前期後半新相は、山陰においても、前方後円墳が本格的に築造されはじめるなど広域性が顕在化する時期でもある（岩本2014・2016など）。そうした状況を

ふまえれば、奥才古墳群あるいはその周辺で創出された「奥才型木棺」が、日本海沿岸部の広域交流の促進によって首長墳の埋葬施設形式として北近畿の諸集団に受容され、そこから近畿中央部へと拡散した可能性が高いと考えたい。

おわりに

本稿では、島根県奥才古墳群を具体的な対象として、埋葬施設の構造と古墳におけるその関係性に着目しながら、古墳群の集団構造を分析するとともに、「奥才型木棺」を通じて該期の集団関係の特質を論じた。

その結果、奥才古墳群では箱式石棺を起点に組合式木棺が長大化するプロセスをスムーズに追えることが判明し、長大化の一つの到達点として「奥才型木棺」の成立を評価することが可能であることを説いた。さらに、奥才古墳群では小規模墳で採用された「奥才型木棺」であるが、北近畿では小地域内で首長墳に採用される傾向が強い点に着目し、時期的にも北近畿から近畿中央部へ波及したと考えられるなど、北近畿が「奥才型木棺」の広域展開に大きな影響を与えた可能性を指摘した。つまり、「奥才型木棺」は奥才古墳群など特定集団の階層化のなかで上位層の埋葬施設として採用され、日本海を介した広域交流によって北近畿など他地域の首長墳の埋葬施設として積極的に採用されるに至ったと考えられる。

ただし、くりかえし述べたように、奥才古墳群における「奥才型木棺」をたんに小規模墳の埋葬施設と評価するのは不適切である。奥才古墳群の被葬者にはいわゆる「首長墳」の被葬者に匹敵する副葬品を保有する例があるからである。そこには、墳丘規模や墳墓築

造において、「首長墳」とは異なる指向性を保持した有力者層の存在を想定すべきであろう。ここに、「群集墳」にかかわる議論とは質的に異なる小規模墳を研究する意義と展望をみいだすことができよう。

付 記

2022年3月をもって島根大学をご退職になる出口顯先生に本稿を献呈いたします。共同研究の場などをとおして、出口先生には文化人類学のお立場から貴重なコメントを頂戴するなど学問的刺激を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

なお、本稿の内容は2021年5月15日におこなわれた、かしまの歴史・文化を学ぶ会主催講座での報告内容を基礎にしたものです。講座の準備に際して、松江市立鹿島歴史民俗資料館の赤澤秀則氏から資料提供ならびに貴重なご教示を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

本稿は島根大学法文学部山陰研究センターによる山陰研究プロジェクト「既掘考古資料の集成検討および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究」(2019～2021年度)の研究成果の一部である。

註

- (1) 前期前半とみられる57号墳第1主体部の組合式木棺では、墓壙直上に薄い堆積層が面的に確認されており、棺底板が存在していた可能性が高い。この点は、以下で分類の対象とする組合式木棺とは異なり、1・2類に類型化した木棺はいずれも底板をもたない。
- (2) 奥才古墳群の例ではないが、2類に相当する兵庫県茶すり山古墳第1主体部では、棺内床面直上で出土した鉄製品の下面に、棺材に由来する木質が付着した例は皆無であった。また、京都北部で多数確認されている礫敷木棺でも底板がともなうと想定された例は存在しない(石崎1997:127)。とくに、北近畿では仕切板を設置するための掘り方を墓壙底に掘削する例があり、それらの礫敷との位置関係や土層の状況からも底板が存在する可能性はきわめて低いと推定される。
- (3) 検討の対象を同一古墳とせず、同一墳頂に限定するのは、墳頂部の埋葬と周辺埋葬を明確に区分する必要があるからである。筆者は、周辺埋葬に堅穴式石槨や粘土槨、超大型の木棺が存在しないことから、それらを従属的な埋葬と評価しようとする清家章の指摘を妥当なものと考えている(清家1999)。
- (4) なお、本稿の分類指標は、分類名称の参考とした岩永省三の研究とは厳密な意味では異なる(岩永2010)。本稿では墓壙規模や副葬品の量・質は加味せず、棺に特化して分類をおこなう。同格型を棺のみから中心埋葬を抽出できない例、格差型は中心埋葬を抽出できる例としている点でも差があるので、注意されたい。
- (5) ただし、14号墳では墓壙規模において第1主体部が第2主体部を凌駕する。また、この差と副葬品の質・量の差が対応する。
- (6) この問題を解決するには、名分丸山1号墳や鶴灘山6号墳など、奥才古墳群の周辺において系列的に築造された首長墳の実態把握が不可欠である。今後の調査研究に期待したい。
- (7) 清家章は鉄器の折り曲げ副葬を鏡の副葬に代わる行為と評価する(清家2002)。この点については、奥才古墳群では鏡と

の共伴例である点に留意しておきたい。

- (8) ただし、14号墳と13号墳がほぼ同時期でありながら、円墳と方墳という異なる墳丘形態を採用する点には、別途説明が必要と考える。円墳と方墳を連ねた様相は、あたかも2基が前方後円墳を意識して築造した可能性を想起させるからである。2基を前方後円墳とみただけの場合、その墳長は約42mとなり、出雲東部地域における副葬鏡の直径にみる序列と墳丘規模の序列の関係をきわめて整合的に説明しうようになる。また、14号墳が円墳であることは、その築造時期が前後半古相である点をふまえると、小谷3式新相段階(≒前期中葉～後半古相)にはじまる墳丘の円墳化(松山2002)の嚆矢となりうる点にも注意が必要である。以上の点については、今後さらなる検討を試みたい。

なお、円墳と方墳を連ねて前方後円墳にみただけと推定される例として、大阪府弁天山B3号墳(前期中葉～後半古相)を参考までにあげておく。

- (9) 北近畿では2類木棺で、「奥才型木棺」に該当しない棺長が短く、棺内区画のない例がいくつか確認されている。ただし、京都府奥大石1号墳第1主体部と兵庫県梅田16号墳第2主体部、兵庫県向山10号墳第1主体部はいずれも古墳時代中期に下るなど、「奥才型木棺」の先行型式になりうるものではないと考える。

引用文献

- 赤澤秀則 2002「IV.小結」『奥才古墳群第8支群』島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会 pp.53-60
赤澤秀則・三宅博士・広江耕史ほか 1985『奥

- 才古墳群』鹿島町教育委員会
赤澤秀則・川西 学・徳永 隆・徳永桃代ほか 2002『奥才古墳群 第8支群』島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会
石崎善久 1997「京都府下における礫床をもつ木棺について」『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会 pp.127-137
石部正志 1975「古墳文化論」『日本史を学ぶ』1 原始古代 有斐閣 pp.46-62
磯貝龍志 2019「3 農工具からみた伯耆国分寺古墳」『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学考古学研究室調査報告第18冊 島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会 pp.61-68
岩永省三 2010「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』第8号 九州大学総合研究博物館 pp.17-42
岩本 崇 2003「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第6号 大手前大学史学研究所 pp.1-20
岩本 崇 2010「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第383冊 兵庫県教育委員会 pp.507-518
岩本 崇 2014「前方後円墳の広域展開と日本海を媒介とした交流の諸相」『倭の五王と出雲の豪族 ヤマト王権を支えた出雲』島根県立古代出雲歴史博物館 pp.33-36
岩本 崇 2015「山陰における古墳時代中期首長墓の展開と「地域圏」の形成—古墳時代中期の地域社会と集団関係—」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター pp.210-225
岩本 崇 2016「山陰の前期古墳—前方後円墳と前方後方墳—」『考古学ジャーナル』

- No.681 ニューサイエンス社 pp.22-26
- 岩本 崇 2018 「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.137-148
- 岩本 崇 2019 「三角縁神獣鏡生産の展開と製作背景」『銅鏡から読み解く 2 ～ 4 世紀の東アジア』アジア遊学 237 勉誠出版 pp.126-147
- 岩本 崇 2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会 pp.39-82
- 岸本一宏（編） 2008 『芝花弥生墓群・古墳群』兵庫県文化財調査報告第 345 冊 兵庫県教育委員会
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第 38 巻第 1 号 史学研究会 pp.1-20 (1961 『古墳時代の研究』青木書店 pp.137-159 に補訂再録)
- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』第 6 巻第 1 号 考古学研究会 pp.13-20
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』岩波書店
- 下垣仁志 2003 「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第 50 集（上）九州古文化研究会 pp.7-35
- 清家 章 1999 「古墳時代周辺埋葬墓考一畿内の埴輪棺を中心に一」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集 大阪大学考古学研究室 pp.231-260
- 清家 章 2002 「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』第 36 号史学篇 大阪大学文学会 pp.1-24
- 田中 謙 2006 「瀬戸内における折り曲げ鉄器副葬と地域間関係」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会 pp.525-534
- 田中 謙 2017 「5 折り曲げ鉄器の副葬と笠置峠古墳」『笠置峠古墳』愛媛大学法文学部考古学研究室報告第 13 冊 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県西予市教育委員会 pp.241-250
- 田中良之 2000 「墓地からみた親族・家族」『男と女、家と村』古代史の論点② 小学館 pp.131-152
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権一階級形成の日本の特質」『講座日本史 1』東京大学出版会 pp. 29-66
- 都出比呂志 1984 「農耕社会の形成」『講座日本歴史 1 原始古代 1』東京大学出版会 pp. 117-158
- 松山智弘 2002 「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 pp.243-249
- 松山智弘 2015 「山陰」『前期古墳編年を再考する II 一古墳出土土器をめぐる一』中国四国前方後円墳研究会第 18 回研究集会 中国四国前方後円墳研究会 pp.27-118
- 松山智弘 2018a 「山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房 pp.161-174
- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第五巻近畿 I 角川書店 pp.325-350
- E・サーヴィス（松園万亀雄 [訳]）1979 『未開の社会組織一進化論的考察』弘文堂

遺跡文献

- 【萱葉 1 号墳】柳田康雄 1984 『萱葉古墳群』志免町文化財調査報告書第 2 集 志免町教育

委員会

【千鳥 21 号墳】古賀町教育委員会（編）

1985『浜山・千鳥遺跡』古賀町教育委員会

【奥才古墳群】赤沢秀則・三宅博士・広江耕史ほか 1985『奥才古墳群』鹿島町教育委員会、赤澤秀則・川西学・徳永隆・徳永桃代ほか 2002『奥才古墳群 第 8 支群』島根県松江土木建築事務所・鹿島町教育委員会

【名分丸山 1 号墳】赤沢秀則 1984『名分丸山古墳群測量調査報告書』島根県鹿島町教育委員会

【鶴灘山 6 号墳】島根大学考古学研究会 1983「第 2 章 講武地区の遺跡」『菅田考古』第 16 号 島根大学考古学研究会

【春日山 4 号墳】廣濱貴子（編）2009『春日山古墳群 寺ノ脇遺跡』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団

【金崎 6 号墳】岡崎雄二郎 2012「103 金崎古墳群」『松江市史』史料編 2 考古資料 松江市

【月廻 7 号墳】勝部昭 2012「93 月廻古墳群」『松江市史』史料編 2 考古資料 松江市

【上野 1 号墳】林健亮・原田敏照 2001『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

【造山 1 号墳】森貞成 1939「出雲國能義郡荒島村出土の遺物について」『考古学雑誌』第 29 卷第 12 号 考古学会、出雲考古学研究会（編）1985『荒島墳墓群』古代の出雲を考える 4 出雲考古学研究会、渡辺貞幸・金山尚志ほか 1999『荒島古墳群発掘調査報告書』安来市埋蔵文化財調査報告書第 27 集 安来市教育委員会

【斐伊中山 2 号墳】杉原清一 1993『斐伊中山古墳群一西支群一』島根県木次町教育委員会

【間谷東古墳】今岡一三（編）2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ古

墳・間谷西古墳群』島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

【田和 1 号墳】兵庫県教育委員会（編）1987『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和 59 年度』兵庫県教育委員会

【筒江中山 23 号墳】小川良太 1992「230 筒江中山古墳群」『兵庫県史』考古資料編 兵庫県、岩本崇 2010「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第 383 冊 兵庫県教育委員会

【茶すり山古墳】岸本一宏・岩本崇・加藤一郎・千葉太朗ほか 2010『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第 383 冊 兵庫県教育委員会

【向山 10 号墳】中村弘（編）1999『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告第 191 冊 兵庫県教育委員会

【梅田 16 号墳】仁尾一人（編）2003『梅田古墳群』Ⅱ 兵庫県文化財調査報告第 257 冊 兵庫県教育委員会

【馬場 17 号墳】山東町教育委員会（編）1988『五反田・馬場遺跡群現地説明会資料』山東町教育委員会

【芝花 10 号墳】岸本一宏（編）2008『芝花弥生墓群・古墳群』兵庫県文化財調査報告第 345 冊 兵庫県教育委員会

【弁天山 B 3 号墳】堅田直 1967「弁天山 B3 号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第 17 輯 大阪府教育委員会

【弁天山 D 3 号墳】田代克巳 1967「弁天山 D 3 号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第 17 輯 大阪府教育委員会

【心合寺山古墳】吉田野乃（編）2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書一史跡整備に伴う発掘調査の概要一』八尾市教育委員会

【湯の山古墳】森村健一 1976 「湯の山古墳発掘調査概要」『土師遺跡発掘調査報告書』

その1 堺市教育委員会

【大田南6号墳】横島勝則・丸山次郎（編）1998 『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡 第2次～第5次発掘調査報告書』弥栄町教育委員会

【奥大石1号墳】竹原一彦・小池寛ほか 1990 「近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第37冊 財団法人京都府遺跡調査研究センター

【ヌクモ2号墳】竹原一彦・小池寛ほか 1990 「近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第37冊 財団法人京都府遺跡調査研究センター 6
【溝谷2・3号墳】田代弘 1994 「溝谷古墳群」『京都府遺跡調査概報』第60冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

【奈具岡北1号墳】河野一隆 1997 「奈具岡北古墳群」『京都府遺跡調査概報』第76冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

【日ノ内古墳】岡田晃二ほか 1985 「千原古墳・弓木城跡」『京都府岩滝町文化財調査報告』第7集 岩滝町教育委員会

【左坂C21号墳】石崎善久・引原茂治 1999 「(1)左坂古墳群」『京都府遺跡調査概報』第89冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

【町田東3号墳】森下衛・辻健二郎（編）『船坂・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第8集 京都府園部町教育委員会

【岸ヶ前2号墳】門田誠一（編）2001 『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学校地調査委員会

【西山塚古墳】石井清司ほか 1994 「木津地区所在遺跡」『京都府遺跡調査概報』第56

冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

【内田山B2号墳】竹原一彦・筒井崇史 2007 「(1)内田山遺跡・内田山古墳群第6次」『京都府遺跡調査概報』第124冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

図表出典

図1 赤沢ほか 1985、赤澤ほか 2002 を引用・再構成。

図2 赤沢ほか 1985 を引用・再構成。

図3 赤沢ほか 1985、赤澤ほか 2002 を引用・再構成。

図4 赤沢ほか 1985 を引用・再構成。

図5 松江市立鹿島歴史民俗資料館蔵。

図6 1・2：松江市立鹿島歴史民俗資料館蔵。

図7 岩本作成。

表1 赤沢ほか 1985、赤澤ほか 2002 を参照しつつ岩本作成。

(所蔵機関を明記したものは、岩本撮影・実測による。)